

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆 吉則

地主の末裔たちが農業をリードしている

僕は30数年前から、取材する農家の方に農家としての出自を聞いてきた。すべての方に聞いたわけではないが、その多くが地主あるいは自作農の孫ひ孫たちだった。もちろん、小作出身ですばらしい経営者もおられる。でも、僕が「農業経営者」と呼ぶ人々、あるいは農業・農村の現在を担う人々の大多数は地主か自作農の末裔だと言っても間違いではないだろう。

出自だけで人々の資質を比較することの問題性は十分理解しているが、なぜ農地改革で農地を失った在村地主階層の末裔たちが現在の農業をリードしているのか。そして、結果として農地改革で失った農地を地主の子孫たちが小作者として改めて集積している理由を農業関係者は問い直してみるべきである。

その検証を通して、我が国の農業政策の根本にある農地改革イデオロギーあるいはそれに基づく「農地法」を根本から問い直すべき時代が来ているのではないか。同時に、現在の小農を温存させる政策から農業経営者に焦点を当てた政策に転換すべきだと思う。

さらに、農地改革と同時進行的に成立してきた戦後の農業協同組合の初代の組合長たちの多くは農地改革でわずかな自作地を残して二束三文で農地を買いたたかれた元地主たちである。インフレが進む時代にタダ同然の形で農地を奪われたと当時の地主たちは思ったはずだ。そんな農地改革を経たにもかかわらず次代の農村リーダーに元地主たちが民主的に選ばれていったのはなぜなのか。

それは地主たちこそが農業経営者であり農村経営者としての自負を持つ存在であることを当時の村人の誰もが認めていたからではあるまいか。そしていま、かつての地主の末裔たちが小作の形で地域の農地を集積している。それも行政が中間管理機構を作って農地の集積を進めているからではない。高齢化によって農業を続けられなくなった農家が土地を委託するに足る信頼感のある農業経営者に農地が集まってきているのである。しかし、北海道で規模拡大を進めるある読者は、農業委員会が農地法を盾にしてすでに大規模経営をしている彼が農地を買うことを規制するという。

一方、本誌読者のなかには一度に

数10haもの単位で農地を委託したいと要請されることがあると聞く。間雲な規模拡大など経営破たん結びつきかねない。規模拡大を実現してきた人々は水田でも本誌が勧める畑作技術体系に取り組んでいるだけではない。何よりも土、農地の持つ可能性を高めていくことに労を惜しまない人々なのだ。

農業を学ぶ僕の先生であった茨城県牛久市の高松求さんは「冬に働ける農家が勝者なのだ」と言っていて、借りた農地に暗渠を入れ、寒起こしを怠らなかつた。また、同じ牛久の橋本茂さんは「土を作れば作物は勝手に育つ」と言っていて、春の風で土が飛ぶのを防ぐためにくず麦を緑肥としていた。

おわかりいただけるだろうか。目の先の損得だけでなく未来のために土を養う労を厭わない人々。しかも、技術革新に取り組み、時代の変化を見つめ自らの進むべき道を見いだしていく農業経営者。僕は農業経営者のことを時代を見つめ顧客に気づきそれに応える努力をする人と書いているが、その前提にはこの土に対する思いの深さがあるのだ。

こうした経営理念を持つ農業経営者たちに焦点を当てた農業政策が始まるべきなのだ。次号では、それを体現する若い読者を紹介する。